

〈家族愛問う幼い目〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

ここ数年、日本初公開という国や監督の作品が次々に紹介されている。ただ

風景の美しさや未知の土地柄として外国(映画先進国)映画にロケーション撮影だけされるのと違い、その土地ならではの人の手で描かれた内容は、こんなにも生き生きと面白いのか、と感慨深い。

この作品も、チベット生まれの監督による日本初公開のチベットの一家の話。六歳の少女の目から家族愛の葛藤を切なくもしみじみと描き出す。壮大な自然の美しさと厳しさに呼応するように、甘えと不安に揺れながら自問し成長してゆく幼い少女の心の動きが、手に取るように伝わってくる。変わりゆく草原の民の実生活も興味深い。

このかわいらしい少女の名前はヤンチェン・ラモ、六歳。チベットの草原で両親とテントに暮らしている。祖父もいるのだが、なぜか遠くの川向こうの山の洞窟に一人で暮らし、近隣の人々に「行

者さま」と崇められている。

父グルは無口だが、ヤンチェン・ラモをかわいがり、時々バイクの後ろに乗せて川向こうまで連れて行ってくれる。実は自分が実父に会いたくないので、自分の代わりに孫を会わせるためなのだ。なぜ、お父さんはおしいちゃんに会いたくないの？ 嫌いななの？ 幼い心は、疑問でいっぱいだ。

母ルクドルは優しく、ヤンチェン・ラモはまだ母のおっぱいを飲むほど甘えている。だが、もうすぐ赤ちゃんが生まれると知り、生まれたら母を赤ん坊に取られるのではと不安に駆られる。

平和な一家だが、ルクドルは義父が気に入り。雪解けの頃、行者さまの体調が悪く、村人は皆見舞いに行ったりと聞き、母はグルにお見舞いの食べ物を持たせて見舞いに行かせる。ヤンチェン・ラモもバイクの後ろに乗せてもらって一緒にいった。だが…。

父親に会いもしなかったグルの嘘に激怒する妻に向かって、グルは初めて父親を許せない理由を泣きながら話す。それは、幼いヤンチェン・ラモには善悪も解決もわからないことだった。ただ、父の悲しみはわかる。ルクドルは、行者の息子であるグルの態度に、村の共同体の中で立場がないと心痛める。

祖父はもともと僧侶で、文化大革命で一度僧衣を脱いだだが、解放後再び僧衣をまとった。孫ヤンチェン・ラモが訪ねて来た時、キスして泣いた。洞窟の中で修行を続けていても、家族に会うのはうれしいのだ。だが四年前、妻が瀕死の床で会いたいと言った時、迎えに来た息子グルに「自分が行って何になる。それより、ここで祈っていたほうがましだ」と言って応じなかった。グルとの確執はそれ以来。家族愛とは、何なのだろう。氷雨降る広大な草原を、病院から息子のバイクの後ろに乗って戻るとき、やっぱり川向こうの洞窟を選ぶ祖父。ヤンチェン・ラモは後髪を引かれる思いのまま、ただ父と一緒に走り去るしかなかった。夏の放牧地へ移動したある夜、羊が狼に襲われる。生き残った子羊をヤンチェン・ラモはかわいがりが…。悲しいことに遭う度に、強く賢くなっていく幼い命の力が清々しく、力強い。

『草原の河』

中国映画(98分)

監督: ソンタルジャ

出演: ヤンチェン・ラモ、ルンゼン・ドルマ、
グル・ツェテンほか

4月29日より岩波ホールほか全国順次公開

© GARUDA FILM